

日蓮聖人の本尊の実体と形態について

—主な諸先師の解釈を中心として—

桑名 法晃

一、はじめに—問題の所在—

日蓮聖人の本尊に関する論議はこれまで盛んにおこなわれてきた。これは日蓮聖人によってあらわされた本尊の説示について、首題本尊・釈迦一尊・大曼荼羅・一尊四土・一塔兩尊四土といった表現形態の違いがみられるため、それをどのように捉え、解釈すべきかという問題である。この問題の中心は、本尊の実体は「人格的」のものであるか、「法格的」のものであるかという本質論と、その本質を具象化する表現の形式において、「大曼荼羅」式か、或は「一尊四土」式かという形態論である。

人法本尊論については、遺文上に人格体を示したものと、法格体を示したものと両様の表現の記述がみられるため、この二種をいかに会通すべきか、または両様の表現をそのまま認め

ようとするかに大別できるといえよう。前者の場合、人法一体・人法一如によって会通をはかり、また後者においては人法勝劣を論じ、取捨選択をおこなっている。また前者の人法一体論者の中においても、いうところの人格体に法格体を撰入する人本尊論者と、いうところの法格体に人格体を撰入する法本尊論者に大別される。また、この本質論はそのまま形態論に移行し、法格の南無妙法蓮華經・大曼荼羅をとるか、または人格である本門の教主釈尊をとるかという問題が提起されている。この形態論を主張する先師において、その主張は極めて複雑であり、多くの解釈がなされてきている¹⁾。

ここではまず、近代以降の本尊論に大きな影響を与えた優陀那日輝を起点とし、現代に至るまでの主な先師の本尊論、特に人法論、形態論についての主張を概観していきたい。このことにより、筆者が日蓮聖人の本尊の実体と形態を考察する一助とし、また先師の研究を踏まえたうえで、自らの研究における基本的な立場を明確にしていきたいと考えるものである。

日蓮聖人の本尊の実体と形態について——主な諸先師の解釈を中心として——

二、諸先師における本尊解釈の概要

(1) 優陀那日輝 (一八〇〇—一八五九)

優陀那日輝は『妙宗本尊略弁』(以下『略弁』と略記)において、「我宗ノ本尊。二種ノ別アリト謂ハ。祖意ニ達セサルナリ。豈二種ノ所尊ヲ立テ。初心ヲ迷惑セシムルノ理アラシヤ」と断じ、人格体・法格体の二種の本尊があることは、同一本尊の二面観であるとして論理づけ、会通をおこなっている。

『略弁』冒頭にて本尊に人法二種の別ありとする迷惑の根源に「眼前の迷惑」、「心底の迷惑」、「学問の迷惑」の三点を挙げ、その迷惑を破して会通をはかっている。その中の第一「眼前の迷惑」においては次のように主張している。

本尊ニ書給所ノ題目ハ。即久遠実成ノ仏体ナルコトヲ不_レ知。故ニ迷ヲ生スルナリ。然ニ法ガ即仏也ト云義ニハ非ス。直ニ久遠ノ仏体ヲ。題目ヲ以テ顯シ給ナリ。其故ハ久遠ノ仏ハ。或説己身。或説佗身等ト説給テ。其形相モ不_レ定。名字不同。年紀大小ト説給テ。其名号モ不_レ定。故ニ妙法五字ヲ以テ。久遠ノ仏体ノ名号ト定テ。本尊ノ中

央ニ書給ナリ。

日蓮聖人の大曼荼羅の中尊である題目は、久遠の仏体を顕わしているものとして、人法一体を論じているのである。このように日輝は、人法一体を論じた上でさらに、

観心本尊鈔云。其本尊為_レ体。本時_レ娑婆_レ上。宝塔居_レ空。塔中_レ妙法蓮華_レ經_レ左右。釈迦牟尼_レ仏。多宝_レ仏。乃至正像_レ未_レ有。寿量_レ仏。来_レ入_レ末法_レ始_レ此_レ仏像_レ可_レ令_レ出現_レ。文
分明ニ大曼荼羅ノ体相ヲ顯シ。直ニ之ヲ指テ。寿量品仏ト云ヒ。又此_レ仏像ト名_レ給_レヘリ。(中略)送状云此書日蓮當_レ身一期大事也ト。縦余ノ御書ニ法ヲ本尊トスル文アリトモ。余書ヲ取テ本尊鈔ヲ捨ヘケンヤ。況本尊鈔而已ニハ非ス。報恩鈔。開目鈔。四菩薩造立鈔。三大秘法鈔等。諸ノ不_レ輕。大切ノ御書ニ。仏ヲ本尊ト定_レ給_レヘリ。當_レ知余書法本尊ノ説アル者ハ。随佗意語。未_レ顯_レ真実ノ法門也。(中略)我宗一同ノ本尊ハ。但是久遠ノ本仏。大曼荼羅ノ尅体タル本尊也ト知_レルヘシ。

と述べ、人法一体の上に仏本尊を主張し、大曼荼羅の中尊は久

遠本仏であつて、その久遠本仏が大曼茶羅の尅体であり本尊であると論じているのである。

また、本尊の形態に関しては『妙宗本尊弁』に、

一尊四士。兩尊四士。十界本尊。但是広略異耳⁽⁵⁾。

三大秘法中。本尊別取レ仏。觀心本尊。章亦但以レ仏

為レ本尊^ト。挙レ大曼茶羅相貌^ヲ已^テ。直指云^ニ此仏像等^ト。

則知無作三身教主釈尊^ト。十界具足大曼茶羅。無レ二無レ別。

但名体相異耳。故知木像釈迦。十界本尊。亦但広略木

画異耳。斯知木像釈迦親^ニ於名^ニ疏^ニ於実^ニ。十界本尊。

親^ニ於実^ニ疎^ニ於名^ニ也。故約^ニ教門^ニ則宜^ク取^レ釈迦木像

一。約^ニ觀門^ニ則宜^ク取^レ二十界曼茶羅^ヲ。各有^ニ其便^一故也。

然当家本意遂在^ニ於曼茶羅^ニ。經意固然^ル故也。法師神力

是表^レ而出^レ法。寿量是裏^ニ而出^レ仏。即是曼茶羅之表

裏^{ナル}耳⁽⁶⁾。

と述べ、一尊四士、二尊四士、大曼茶羅は、体は同じであつて

相が異なっているに過ぎないという。その上で、一尊四士、二

尊四士は略本尊であり、教門の本尊の立場であるから、正意は

あくまでも觀門の大曼茶羅であると主張している。しかし日輝は、木像の釈尊を否定しているわけではない。『妙宗本尊弁』

で「名に親しく実には疎である」と説示した意を『略弁』にお

いては、

仏像安置ノ義ヲ弁者（中略）是則得意ノ者ニ於ハ。大曼茶

羅ノミニテモ宜キナレトモ。初心ニハ有相ノ仏果ヲ求ルハ

通機ナル故。初心ヲ撰スル意アルヘシ。又仏国土清淨莊嚴

ノ為ナレハ。寺院ノ殿堂ニハ金木等ノ。美形ノ仏像ヲ安置

シテ。妙法ヲ光顯スヘシ⁽⁷⁾。

と述べ、初心のものに対しては、はつきりと有相という具体性

をもつて示される仏像本尊を修行の便宜上認めていることがわ

かるのである。

(2) 田中智学（一八六一—一九三九）

田中智学氏は、本尊についてその実体の本質は人法一体であることを次のように主張している。

人法二種が全く異ツたものとすれば、聖祖が異ツた二種の

日蓮聖人の本尊の実体と形態について—主な諸先師の解釈を中心として—

本尊をお説きになる道理はない。蓋し実体は唯一つであるのをば、名称でか、理義でか、その頭はすべき便宜々々があつて、或は「法」と説き、或は「仏」と説かれたものであろう、といふのが、総てにおいて尤も公平なる意見とせられてある⁸⁹⁾。

そして、「人格体・法格体二種の本尊」がある表記に関して、いかなる便宜によつて二種の説かれ方がなされるのか、その理由こそ究明すべき問題であるとして、遺文上にあらわれる「人法勝劣」について次のように解明を試みている。

法勝仏劣の法門は、前いふ如く能生所生を以て聖祖が一般仏教に対して中心点統一を定むるために仰せ出された大判である、所謂諸宗対破折伏の大旗で、仏教統一の大権的発動である。(中略)斯く法勝仏劣は諸宗統一の爲であるから、「法勝仏劣対他門」といふ。(中略)仏勝法劣の法門は先に一切諸仏の能生となつた法そのものゝ深さを示して、単に理常住をいふ迹門の理円常住法身常住の義を破する爲めに開かれた大切なる御法門で、之を「仏勝法劣対迹

門」といふ⁹⁰⁾。

そしてさらに、人法勝劣について、これを要するに、人法勝劣の問題は、本門の法と仏における勝劣を論ずるのでなくして、或は権迹の仏を統一せんが爲に、本門の法を以てし、或は権迹の法を破せんが爲に本門の仏を以てしたものである。(中略)常に「劣」となり「所破」となる「法」と「仏」は、わが所謂法華經の分外的ものである。常に「勝」となり「能破」となる「法」と「仏」は、わが所謂法華經の分内的のものである⁹¹⁾。

と会通し、人法一体を説いているのである。また本尊の実体については、

「本門の本尊」の実体は何だといふと、これ久遠本仏が本果妙の大覚位に安住して法界方法を功德化したまへる体性相であつて、妙法蓮華經の名によりてその御正体を顕はされた、所謂『十界本有の功德を集めて、之を仏乗化したる究竟莊嚴の尊容』を以て形相とせる、『本法中尊十界円具、人法一如功德莊嚴の妙法曼荼羅』である⁹²⁾。

と述べ、本尊の実体は妙法蓮華經の名で頭わされた久遠本仏であり、その尊形は十界円具の大曼荼羅として図頭されたものであるとするのである。

そして、本尊の形態に関しては、田中智学氏の高弟である山川智應氏がその著『本門本尊論』にて、田中氏の説を「一尊四士は、教理的に本門の釈尊を示したものである。二尊四士は、修行的に境・智一如を示した略本尊である。いづれも略本尊であつて、本宗の正意の本尊ではない、本宗の正意の本尊は、どうしても大曼荼羅でなければならない⁽¹²⁾」としているとの認識を示している。

この本尊の形態に関して、田中智学氏は「本尊瑣談」で、大曼荼羅の表現形式としては、

木像でも銅像でも絵でも文字でも道理にvarietyはない、十界久遠輪円具足の妙相が発揮されてあらば可いのである⁽¹³⁾と述べ、木像の本尊を必ずしも否定はしていないが、つまるところは文字式でしか正式の本尊は頭わすことができないため、本尊は文字曼荼羅に限るとされている⁽¹⁴⁾。

また、日蓮聖人御図頭の大曼荼羅に多種の形式がみられることに關しては、

一々に所対に接して授法せらるゝ場合に、その臨機適事の進退ありて、四悉檀の化導意匠を尽された徴証としては、授法曼荼羅の形式に種々の例を貽されたことではあるが、それは一体の妙用無尽なるを意味したもので、決して一定の本式がないといふことでは勿論ない、変化いよいよ多くして本体いよいよ正明である⁽¹⁵⁾。

と述べている。田中氏はその多種ある大曼荼羅の中でも、殊に佐渡始頭の大曼荼羅を重視している。即ち、

『文永十年七月八日、日蓮始めて之を図す』と名乗られて、誰れと指せる個人の相手なく頭はしたまひたるは、正しく総である通である正である⁽¹⁶⁾。

と表現し、この佐渡始頭大曼荼羅をもつて本尊を統一すべきことを主張しているのである⁽¹⁷⁾。また田中氏は、次のように文永十年七月八日付の佐渡始頭の大曼荼羅には総帰命式の他に、四聖帰命式があることを主張している。

日蓮聖人の本尊の実体と形態について——主な諸先師の解釈を中心として——

総帰命は専ら内証観門の一边を顕はし、通式の方は正しく修行の正軌に順応して、因果の定規を正し、教観二門の相成一致を図示して宗定本尊の公式と定められたものであらうとおもはれる、今は修行門の正軌を取て内証観道を要としないから、総帰命の御形木を宗定本尊とすることを不可とする⁽¹⁸⁾。

ここでいう通式とは四聖帰命式の曼荼羅のことである。この四聖帰命式の佐渡始頭曼荼羅は田中智学氏当時より、真筆ではないという説があつたものである。現に山川智應氏の時代には学問上真筆でないことが明らかとなつている。そこで、山川氏は「佐渡始頭教門の本尊といふものは、現在のものは、今日の如く真蹟が明らかになつた時代では、これを真蹟とすることはできない⁽¹⁹⁾」⁽¹⁹⁾といひながらも、しかし、

昔し多く真蹟が拜せられなかつた時代では、これは真蹟と見られてもよいくらゐる立派な筆蹟である。記録はないといふことは必ずしも最後の証拠にはならない。(中略)あるべき理があつたらば、それを必ずしも否定することは出来

ない。(中略)我々は四聖帰命式の存在することを信じて居る⁽²⁰⁾。

と述べ、佐渡始頭曼荼羅には修行門としての四聖帰命式がなければならぬと田中氏の説を肯定しているのである。

(3) 望月歆厚(二八八一—一九六七)

望月歆厚氏は『日蓮教学の研究』にて、本尊の実体と形態上において多様な異議が生ずる問題には、その根源に三点ありとし、その三つを次のように主張する。即ち、

一には、法仏の先後・勝劣といふ教学上、思想上の根本的対立。二には、本尊を表現する形式に、文字式大曼荼羅と木像式形像との異りから生ずる表現上の相異。三には、宗祖授与の大曼荼羅と親拝された木像釈迦仏との自他の場合から生ずる実際上の矛盾⁽²¹⁾。

である。そしてこの三点の問題にさらに解説を加え、次のように述べている。

第一の思想上教学上の問題たる法仏の関係は、古来の先哲

が最も力を尽して検討されて、夙に仏教に於ける法華經の独自の立場、法華經本迹二門構成から生ずる仏本的立脚点が議定された。即ち仏に悟られた法、仏に成就された法界、仏の説かれた教法を基礎とすることは、既に不動である。従つて本尊の法仏に関しては、本宗教学上、仏本尊たるに異論がないであらう。

第二の表現形式の問題は、これを文字、画像、木像を同体の表現異とする真宗の本尊の単一さに比べて、本宗の曼荼羅中尊妙法の五字七字と木像の釈迦仏とは、形貌に法仏の相違が判然してゐて、これを中尊の又は曼荼羅の本仏的解釈を待つて後、同一体に達するのでは理解が容易でない。

ここに教観本尊の論を生じ、人法本尊の異議を再発せしめる素因を蔵する。輝師がこれを「眼前の迷惑」だとしたことは理由のあることである。

第三の宗祖の一代を通じて隨身親拝された木像本尊と、広く門徒の伝持した宗祖真筆直授の文字大曼荼羅とが、若し自行の爲めの一尊と化他の爲めの大曼荼羅などと、自他の

旨趣の相違によつて本尊がその形体を異にするといふならば、その間の相違は如何に解釈すべきか。たゞ形式形貌の相違で、其の体は一であるとのみでは、形式の相違に障へられて本尊の安定感が得られない。第三の点については古來本宗の本尊論史上、十分な注意が払はれてゐなかつたのではあるまいか。宗祖の信仰行儀は、宗徒のそれを規定する最高の規範であるから、最大の留意が必要である。⁽²²⁾

このように、望月欽厚氏は第一の人法論については人勝法劣の人本尊をとり、第二の本尊の形態については、大曼荼羅中尊と木像の釈迦仏を単に同体異相とする解釈には無理があるとしている。そこで、遺文上にあらわれた日蓮聖人の本尊について、「『本尊抄』等の重要遺文に立脚して大局的に立場を決定」⁽²³⁾

すべきであるとして、遺文上の本尊についての検討をおこない、『開目抄』、『観心本尊抄』、『顕仏未来記』、『法華行者值難事』等の文について立論すれば、「釈尊本尊にして形像本尊に落着する。而してまた本尊抄、行者值難事によつてその相貌を規定すれば、一尊四士尊形を取るべきである」⁽²⁴⁾とし、また

日蓮聖人の本尊の実体と形態について—主な諸先師の解釈を中心として—

『報恩抄』によって「本抄は本尊の実体を「釈尊」と剋定する⁽²⁵⁾」と述べている。

また、大曼茶羅については、「大曼茶羅は本尊ではあるが、本尊は必ずしも大曼茶羅ではない⁽²⁶⁾」といい、大曼茶羅と本尊の相違を次のように六点に分けて挙げてている。

一に大曼茶羅は諸仏集会の壇場であり、本門本尊は一仏絶対の本尊相である。二に大曼茶羅は三秘総在の妙境、本尊は三秘開出の本尊、三に大曼茶羅は人法一体の中尊、本尊は仏体主尊の本尊、四に大曼茶羅は三宝総具の本尊、本尊は仏宝独一の本尊、五に大曼茶羅は靈山顕現の理想境、本尊は今日信行の目標、六に大曼茶羅は教証の曼茶羅、本尊は妙行の本尊、等々の対比が考えられる。かくて大曼茶羅は、意趣多含、在世八品の儀相を籍りて理教行証の各重に交渉する基本的概念を具象的に図顕したのである。若し夫れ修行対象の本尊は本門本尊たるべきはいうまでもない⁽²⁷⁾

そして、さまざまな考察を試みた上で、その結論としては、

「聖人の哲学—念三千の図表、理想実現の世界の構図をも籠めて—一幅の曼茶羅を主体的に一本化し、専ら信行所対の本尊を建立したのが一尊四土であると私は断ずるものである⁽²⁸⁾」と、本門の本尊は大曼茶羅ではなく、一尊四土であると断言しているのである。

(4) 茂田井教亨(一九〇四—二〇〇〇)

茂田井教亨氏は、「本尊の原理と形態」において、

信仰として「本尊なるもの」が要請される基底にあるもの、また、要請そのものの本質、そういうものが問題とされて⁽²⁹⁾いない。

と述べ、これまでの本尊問題はほとんどが形式論であり、一体どうして本尊が日蓮聖人によって奠定されたのかという基本問題、それから本尊が暗示しているところの本質的な問題、そういうものが一向に論じられてこなかったと指摘している。

そして、『観心本尊抄』の「雖^ト然^ル所^レ詮^ス非^ニ一^ニ念^三千^仏種^一者^有情^成仏[・]木^画二^像之^本尊^有名^無実^也」⁽³⁰⁾等の文より、

「一念三千」が本尊造立または設定の原理となり、本質となる⁽³¹⁾「こと」を規定している。ではなぜ一念三千が本尊造立の原理・本質論になるのかについては、「一つは一念三千法数構成の原理からであり、一つはまことの一念三千成就の決定的瞬間の有つ本質からである⁽³²⁾」と、二つの原理を挙げている。そして、後者の

この第二の原理こそ聖人の本尊観における本質的な問題であって、その原理は原理性に止まることなく、そのものそれ自体が客観的には本尊の形相を帯びるに至る経路を有つのである。(中略)その原理性をみずからの象徴的世界に能撰する自己実現としての表現的世界は、発迹顕本の積尊の相貌以外の何物でもないのである⁽³³⁾。

とし、日蓮聖人自身の本尊観については、

「九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真十界互具百界千如一念三千」(五五二)が成就された瞬間を、「互具」という概念から「種」の理念に導入し、それが妙法蓮華経の五字七字に象徴されたところにその根底

を置くのである。(中略)「種」という人格的抽象理念は「五字」に収約されることによつて、一方に「教」の概念を伴う。「教」概念はいうまでもなく「種」の人格化であるから、その教の能動的純粹作用の尅体は、とりも直さず「本尊」と仰がれるに至るのである。したがって、その尅体を一言に現わしては「寿量仏」(七一三)となり、「本門寿量品本尊」(同上)となるのである。ゆえに本尊の相貌を象徴的には大マンガラの形式で表現しても、その本尊としての尅体は飽くまでも「五字七字」でなければならぬ。(中略)十界円具のマンガラは(中略)相貌そのものが本尊ではなく、それをそうあらしめる根本尊崇としての尅体は、何処までも「本門寿量品本尊」でなければならぬ。「五字七字」に象徴されるものであり、「本門の教主積尊」に具象されるものであって、これを「本尊」と呼ぶのである⁽³⁴⁾。

と規定しているのである。さらに本尊の形態については

もし、本尊を相・性・体という古典的な概念で一往の区別

日蓮聖人の本尊の実体と形態について―主な諸先師の解釈を中心として―

を試みるならば、相は「一尊四土」の形相となり、性は大

マンドラの象徴となり、体は「五字七字」の実体となるであらう。⁽³⁵⁾

と、一尊四土、大曼荼羅、妙法五字七字の位置づけを示している。

また、この本尊の形態に関して、『本尊抄講讃』においては、「一尊四土を教の本尊」、「大曼荼羅を観の本尊」とし、一般には仏像である一尊四土の方が給仕・礼拝の対象として分かりやすい。大曼荼羅は信仰が深くなってから説いた方がよいから一尊四土を本尊として奉安すべきであると主張しているのである。⁽³⁶⁾

さらに、『報恩抄講讃』においては、本尊の本質と形態について、「本尊みずからが示す本質論であるが、それは（中略）因果即ち本因本果が文字又は形像をもって示されていないものは本尊とはなり得ない、という原則をはっきり認識することである。これが本質である」とし、「本尊は、その形態についてその本質を示し、その本質が形態化されたものでなければならぬ」と述べている。⁽³⁷⁾

述べている。

三、本尊の実体と形態の相関関係

ここで取り上げた四人の先師の解釈では、本尊の実体たる人法論においては、望月敏厚氏が人勝法劣の人本尊をとる他は、みな人法一体の立場に立っている。

今はそれぞれの解釈を云々することが目的ではないが、四師に共通してみられることは、本尊を信仰の対象としてみる場合には、我々修行者の視点に立った本尊の形態が規定されているということである。

優陀那日輝の場合には、観門の大曼荼羅を正意として主張しているが、実際の修行者の立場においては、初心のものに対して金像・木像等の姿形の良い仏像を造立することを認めている。

田中智学氏は、佐渡始頭曼荼羅に二種（総帰命式・四聖帰命式）あるとする点には問題があるが、修行のための本尊としては内証観門の本尊は不可であるという理由から、修行に適した本尊を求め、四聖帰命式の大曼荼羅を正意の本尊と定めている。望月敏厚氏は、人法二種の本質論の時点から、法仏異なった

二種の本尊を同一と見ることは、修行する者にとって理解が容易ではなく、混乱を生じるとし、人法本尊を分かつたうえで、信行所対の本尊として建立されたとする一尊四士を主張している。

茂田井教亨氏は、本尊の実体は人法一体であり、その尅体はあくまでも妙法蓮華經の五字七字・本門寿命品本尊であるとしている。本尊の形態についても傍正を分かっているが、修行する者の立場からは一尊四士の仏像の方が親しみやすく、給仕の対象として適しており、大曼荼羅は修行が進んでいった信心の深いものに対して示すべきであるとしている。またさらに、本尊の形態は本質を離れて存在するのではなく、その形態はつねに本質を示すものであり、その本質が象徴化されたものでなければならず、その原則から外れなければいかなる形態も許されるのであると述べている。

四人の先師の主張は必ずしも同一ではないが、いづれも修行者の立場から本尊の形態が規定されている。また特に日輝、茂田井両師については、修行者の機根に応じた、信心の浅深に

じた本尊の形態の提示があるべきことが示されているのである。

ここから日蓮聖人の本尊の実体と形態について考えるに、上求菩提と向上的に本尊の実体を求めた場合、その実体は一元的である。一方、下化衆生として向下的に本尊の実体より形態を表現した場合には、その形態は多様的であるということがいえる。すなわち本尊の実体得者たる日蓮聖人においては本尊の実体は一つである。一つであるが、その実体を体得した者のさらに他への教化の手段、実体得の方法として、未信あるいは初信、中信、後信の者に対して随宜応用的に開示される本尊の形態は当然種々にあり得ると考えられるのである。

よって、日蓮聖人はさまざま本尊の形態を示されているが、日蓮聖人においては、その実体は一つであり、その実体からあらわされる形態はすべてが認められるべきものであると考えられるのである。茂田井氏が述べているように、本尊の実体・無妙法蓮華經の五字七字を離れては、いかなる形態も本尊としては成り立たないであろう。一方、その本質把握の上には、いかなる形態も許されるのではなからうか。この観点からいえる

日蓮聖人の本尊の実体と形態について——主な諸先師の解釈を中心として——

ことは、本尊の形態はみなその本質・実体たる五字七字の表現であり、象徴態であるということに尽きるのではないかということである。

四、おわりに

以上の先師の解釈を通じ、日蓮聖人の遺文上にあらわれた本尊の説示について、本尊の実体と形態のもつ相関関係を大局的につかむことができたものと思われる。まことに、本尊の実体把握の上にはいかなる形態も許されるのである。よって本小論の考察により、本尊の実体の究明こそ、第一になさねばならぬことであると認識することができた。今までの本尊に関する論議は、形式の面ばかりが問題視され、形態の中に示される本質の部分はおろそかにされてきた傾向があったことは、すでに先師の指摘の通りである。多種多様な本尊の形態の表現のありようは、実体・本質を踏まえた上においては全く矛盾のないことであつた。したがって、種々にあらわされた本尊の形態を理解するためにも、日蓮聖人のみられた本尊の実体・本質についての考察をさらにおし進めていく必要がある。

また、先師が示唆されているように、日蓮聖人において示された種々の本尊の形態が、相手の機根に応じて教示されているとしたら、日蓮聖人はどのような意図のもとに、それぞれの状況にに応じて、その本尊をお示しになられたのであろうか。この点についても今後の研究の課題として、さらに深く考察していきたい。

註

- (1) 優陀那日輝以降の日蓮聖人の本尊の実体と形態に関する研究として、管見にふれたものに以下の論著がある。優陀那日輝撰述『妙宗本尊弁』（充治園全集刊行会『充治園全集』第三編、大東出版社、一九七五年）、同撰述『妙宗本尊略弁』（充治園全集刊行会社、一九七五年）、同撰述『妙宗本尊略弁』（充治園全集刊行会『充治園全集』第三編、大東出版社、一九七五年）、田中智学著『日蓮主義教学大観』第四卷（天業民報社、一九二七年）、同稿「本尊瑣談」（『妙宗』第一〇編第七号、師子王文庫、一九〇七年）、本多日生著『本尊論』（立正結社、一九二五年）、田辺善知著『日蓮聖人の本尊論』（平楽寺書店、一九二五年）、清水龍山著『本門本尊論』（隆文館、一九二五年）、北尾日大著『日蓮宗本尊論』（宗政社、一九二七年）、清水梁山述・高橋善中編

『日蓮聖人世界統一の本尊』（慈龍閣、一九三〇年）、渋谷文英稿「宗祖所立の本尊は己身本尊也」（『棲神』第一八号、一九三二年）、武田海正稿「開目抄・本尊抄・報恩抄の三鈔に顕はれたる本尊の研究」（『棲神』第二〇号、一九三五年）、高田恵忍稿「本尊義旨帰」（『棲神』第二一号、一九三六年）、山川智應著『本門本尊論』（竜吟社、一九三七年）、武田海正稿「本尊の本体について」（『棲神』第二六号、一九四一年）、浅井要麟稿「日蓮聖人の本尊観」（同著『日蓮聖人教学の研究』所収、平楽寺書店、一九四五年）、竹田日濶稿「本門本尊の在り方―一尊一士正境論―」（『棲神』第二九号、一九五三年）、田村芳朗稿「日蓮聖人に於ける仏と法との関係―本尊の問題―」（『大崎学报』第一〇一号、一九五四年）、望月敏厚稿「日蓮聖人の本尊について」（『大崎学报』第一〇四号、一九五五年、のちに同著『日蓮教学の研究』、平楽寺書店、一九五八年に収録）、鈴木一成稿「祖書に示されたる本尊の種々相」（『大崎学报』第一〇四号、一九五五年）、塩田義遜稿「日蓮聖人の本尊（前篇）」（『棲神』第三一号、一九五六年）、執行海秀稿「日蓮聖人の曼荼羅について―特に本尊との関係に於て―」（『大崎学报』第一〇七号、一九五七年）、塩田義遜稿「日蓮聖人の本尊（後篇）」（『棲神』第三二号、一九五八年）、竹田日濶稿「日蓮の本尊と

曼荼羅との相違について」（『印度学仏教学研究』第八卷第二号、一九六〇年）、茂田井教亨稿「本尊の原理と形態」（『大崎学报』第一一六号、一九六三年、のちに同著『観心本尊抄研究序説』、山喜房佛書林、一九六四年に収録）、同稿「観心本尊抄における本尊義について」（『大崎学报』第一一九号、一九六五年）、戸頃重基稿「日蓮聖人における法本尊論の正統性」（『法華』第五四卷第一一・一二号、一九六八年）、渡辺宝陽稿「釈迦仏・法華経」覚え書き」（『現代宗教研究所所報』第四号、一九七〇年）、勝呂信静稿「本尊観私見」（『現代宗教研究所所報』第四号、一九七〇年）、同稿「日蓮聖人の本尊観」（『大崎学报』第一二五・一二六合併号、一九七一年）、窪田哲城稿「日蓮聖人の本尊」（師子王文献編『日蓮主義研究』三、真世界社、一九七六年）、早瀬公人稿「一尊四士と一塔二尊四士に就いて」（『大崎学报』第一二九号、一九七六年）、同稿「日蓮大聖人の本尊観の会通」（『大崎学报』第一三一号、一九七八年）、小野兼弘稿「日蓮聖人の本尊に関する一考察」（『印度学仏教学研究』第二八卷第二号、一九八〇年）、三浦和浩稿「本尊の探求―日蓮聖人の示した本尊―」（『興隆学林紀要』第一一号、二〇〇二年）、塩入幹文稿「日蓮宗の本尊に関する一考察」（『現代宗教研究』第四三号、二〇〇九年）、三浦和浩稿「『本尊問答鈔』

日蓮聖人の本尊の実体と形態について―主な諸先師の解釈を中心として―

日蓮聖人の本尊の実体と形態について—主な諸先師の解釈を中心として—

に関する一考察—日蓮遺文全体における位置づけとその意義—

(『法華仏教研究』第二号、法華仏教研究会、二〇一〇年) ほか。

(2) 『妙宗本尊略弁』(充治園全集刊行会『充治園全集』第三編、大東出版社、一九七五年) 三八九頁。

(3) 右同三七八頁。

(4) 右同三七八—三八二頁。

(5) 『妙宗本尊弁』(充治園全集刊行会『充治園全集』第三編、大東出版社、一九七五年) 三二八頁。

(6) 右同三四六頁。

(7) 『略弁』四二六頁。

(8) 田中智学著『日蓮主義教学大観』第四卷(天業民報社、一九二七年) 二四八九—二四九〇頁。

(9) 右同二四九七—二四九八頁。

(10) 右同二五〇一—二五〇二頁。

(11) 右同二四八二頁。

(12) 山川智應著『本門本尊論』(浄妙全集刊行会、一九七三年) 二〇二—二〇三頁。

(13) 田中智学稿「本尊瑣談」(『妙宗』第一〇編第七号、師子王文庫、一九〇七年) 一一頁。

(14) 田中氏は右註13に引用の文に続けて「然るに特に文字曼茶羅に限るといふのは、頭はす式の上と、勸請する式の上と、修行応用の

便宜の上から見て、最も遺憾なく宗意を表現して、勸請修法の上
に怪我のない、最良最善最正最便の式は、ひとり文字曼茶羅に在
るといふのである、絵や彫刻にはひどく巧拙の祟りがあるが、文
字にはその憂いが少ない、同じ精巧の度合としても、彫刻絵画はよ
ほどの神品にあらざる限り、対すると共に批評心の生ずるもので、
却て雑念を誘起する基であるが、文字は形式が既に超絶して居
るから此難が少い、況して曼茶羅の書法には、一種超凡の筆法が
あつて、優に神韻を保持して居る、それから絵や彫刻ではトテモ
八品の儀相(本化の観たる)を頭はすべき趣向が立たない」(右
同一一—一二頁)と述べ、絵画・彫刻と文字とを比較し、その優
劣を立て、本尊はただ文字曼茶羅に限ることを主張している。

(15) 右同一六一—一七頁。

(16) 右同一八頁。

(17) 右同二六一—二八頁参照。

(18) 右同二六頁。

(19) 山川智應著『本門本尊論』二二二頁。

(20) 右同三七三—三七四頁。

- (21) 望月敏厚著『日蓮教学の研究』（平楽寺書店、一九五八年）一四
一頁。
- (22) 右同一四一―一四二頁。
- (23) 右同一四二頁。
- (24) 右同一四九頁。
- (25) 右同一五三頁。
- (26) 右同一七一頁。
- (27) 右同一七一―一七二頁。
- (28) 右同一七二頁。
- (29) 茂田井教亨稿「本尊の原理と形態」（同著『観心本尊抄研究序
説』、山喜房佛書林、一九六四年）四七頁。
- (30) 『昭定』七一頁。
- (31) 右同五三頁。
- (32) 右同五三―五四頁。
- (33) 右同五六頁。
- (34) 右同六四頁。
- (35) 右同六五頁。
- (36) 茂田井教亨著『観心本尊抄講讃』中（山喜房佛書林、一九八五
年）八六八―八七三頁取意。
- (37) 茂田井教亨著『報恩抄講讃』（佼成出版社、一九八九年）四二五
頁。
- (38) 右同四二六頁。
- 日蓮聖人遺文は『昭和定本日蓮聖人遺文』身延久遠寺発行により、
『昭定』と略した。数字は同書のものである。

日蓮聖人の本尊の実体と形態について―主な諸先師の解釈を中心として―